

女性医師支援センター 便り

平成30年度医学生・研修医支援セミナー報告



宮城県女性医師支援センター委員
 東北大学大学院医学系研究科産業医学分野助教
 玉井ときわ

平成30年6月20日に東北大学星陵会館に於いて宮城県医師会・宮城県女性医師支援センターの主催・日本医師会との共催で医学生・研修医支援セミナーを開催した。本会は毎回多彩な場で活躍している医師を招き、キャリア形成、人生の様々なライフイベントとの両立などをテーマに講演や意見交換がなされ、好評を得ている。東北大学病院輸血・細胞治療部 藤原実名美先生の総合司会で進行した。

シンポジウムは東北大学病院小児科の福與なおみ先生の座長で、「キャリア形成のヒント～私の選んだ道Ⅱ～」をテーマとし、3人の先生を招いた。東北大学病院小児科の大田千晴先生は、「女性医師のキャリアパスとflexibility」という演題で臨床医として非常に多忙な生活を送りながらも国内外の他施設へ臨床・研究両方で飛び込んだ経験を語った。後にお子さんを伴いドイツへ留学をした際、滞在のためにドイツ語学校へ入学することとなった実母の協力についてもユニークに語った。大田先生はゼロよりも一つでも何かすること、キャリア形成にはflexibilityが重要であると述べた。人生の各段階・ライフイベントに応じて既存のキャリアパスにとらわれないキャリア形成の仕方、自身で道を切り拓き、興味を持った分野へ飛び込んでいく行動力の重要性を強調した。

NO PHOTO

大田千晴先生

続いて東北大学病院産婦人科の志賀尚美先生の演題は「産婦人科医を選んで、どうでしたか？」で、女性の一生のサポートを行う産婦人科の魅力について解説した。志賀先生自身はキャリア形成の過程で進路を悩む機会が何度もあったが、指導者に恵まれアドバイスを受けてきたことが助けになったと述べた。現在は生殖医療の場で活躍している志賀先生は複数の資格を取得した理由として、各ライフステージにおいて知識の抜けを極力減らすことを目的としていると述べた。キャリア形成については他者への感謝の気持ちを忘れないようにしながら、自分の人生のプライオリティを考え、その時最善と思うものを選択していくことが大切と述べた。最後に、よく聞かれる産婦人科を選択してどうかという質問には、「年を追うごとに楽しく、選

NO PHOTO

志賀尚美先生

択して良かった」と締めくくった。

シンポジウムの最後は東北大学病院呼吸器内科 小荒井晃先生で、「呼吸器内科医の進路と現状」をテーマとした講演であった。小荒井先生は多くの患者を診療する一方で外来医長、教育担当として多忙な業務を行っている。呼吸器内科医を目指した目的については、救急疾患の診療ができる点、肺～心血管系について疾患を通じて広く学ぶことができる点、肺炎や気管支喘息といった興味のある疾患がある点、内科ながら手技や処置の機会が多い点に魅力を感じたと述べた。キャリアの過程ではロンドン留学の経験についても触れ、女性の比率が極めて多い研究室へ配属された際に、女性が持つマルチタスク能力の高さに感銘を受けたと述べた。呼吸器内科を目指す際の道程についての解説もあり、多くの医師が多様な進路を選択していると紹介した。最後に呼吸器内科は頼りにされ、やりがいがある科である魅力を強調し、留学や異動は多様な価値観にふれるチャンスであり、大学院は物事をじっくり考えるのに良い機会であると述べた。

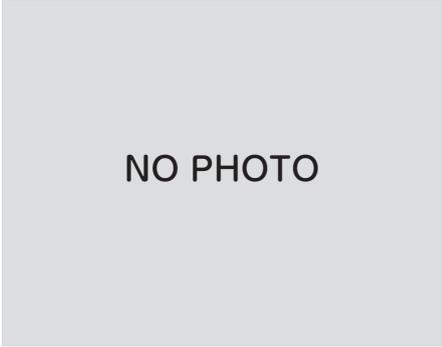
特別講演は東北大学大学院緩和医療学分野の井上彰教授から『『より良く生きる』を支援する緩和ケア』と題して行われた。日本の肺癌治療・研究の第一人者として活躍してきた井上教授は緩和医療科教授に就任した後、その経験を活かし、東北大学病院内のみならず緩和医療学分野の発展に精力的に活動している。臨床の場ではがん治療医ですらも緩和医療に対する理解が不十分であり、そのため患者の意向が二の次となりがちであると述べた。緩和治療の介入により患者はより良く、より長く生きることが可能である。緩和ケアの知識は全ての医療者が身につけるべきものであり、がんと診断された早期から患者や家族を悩ませる「全人的苦痛」に全体で取り組むことが必要であると述べた。緩和ケアは国のがん診療の政策においても手術・抗がん剤・放射線治療の従来の本三本柱と同列に位置付けられており、今後成長が期待できると述べた。井上教授をリーダーとした東北大学病院緩和医療科は多様な出身診療科のメンバーで構成されていると紹介し、将来にかかわらず、緩和ケアを学ぶ意思がある人に門戸を開いていると締めくくった。

多数の出席者があり、盛会のうちに終了した。



NO PHOTO

小荒井 晃先生



NO PHOTO

井上 彰先生